

「毛布が必要だ。一枚でも多くほしい」。インド西部大地震発生から三日後の一月二十九日夜、国際医療ボランティア・AMDA（本部・岡山市櫛津）の小西司・緊急救援対策局長（ま）は折るような気持ちでファクスを送った。あて先は報道各社。送信したのは被災地への救援物資を募る要請文だった。

同日昼、AMDA本部は救援機を送ることを決定。現地の気候や被害状況の情報を集め、必要な物をピックアップしていった。医薬品は不可欠。ライフラインが分断されていれば水もいる。がれきを取り除く建設機械もほしい。

救援機 飛ぶ

現地は砂漠地帯。日中の気温は三〇度を超えるが、夜は一〇度以下になる。家を失った被災者のため毛布は欠かせない。小西局長は裏負を取り扱う企業に連絡した。だが冬場で在庫不足の上、一月十四日に起きたエルサルバドル地震の被災地に送った後だった。

チャーターしたロシア貨物機の離陸は一月一日。当日は積み込み作業があるため、募集期間は二十三日だけ。二日間で民間などからどれだけ集まるかが、かぎだった。

玉野市胸上、中学教諭竹谷和子さんは勤務する東

底力

児中（同市北方）で、全校に救援物資の提供を呼び掛けた。翌朝、生徒や職員らが続々と毛布やシーツを持ち寄ってくれた。

岡山県西栗倉村影石、建設会社役員中島扶左恵さん（ま）は、テレビニュースで物資募集を知った。友人らに声をかけ、毛布十三枚を集めた。月末で多忙だったが、二時間かけ岡山空港へ届けた。

善意の物資 2日で30トン

黒住教本部（岡山市尾上神道山）は県内や福山市など九十五教会所へ連絡。信者だけでなく、つきあいのある寝具店やクリーニング店にも協力を求めた。八百枚以上の毛布が提供され、「善意の物資」は「ネットトラック二台、ワゴン車一台に満載された」。

毛布二千枚、タオル千五百枚、飲料水三才、医薬

品一・五才、パワショベル二台。救援機に積み込まれた物資は約三トン。一九九五年六月のサハリン地震、九六年二月の中国雲南省地震でAMDAが空輸した物資量を大きく上回った。

「わずか二日間です。奇跡のようだ」。小西局長の不安は杞憂（きゆう）だった。AMDA会員情報局の西村肇さん（ま）は「阪神大震災以来、わが国に根付いたボランティアの底力」を感じた。

一月三十一日、岡山空港で荷造りが行われた。岡山市下伊福町、高校三年木村倫子さん（ま）は初めてAMDAの活動に参加した。「外国のことなのにみんなの気持ちがひとつになっていた」という。

長泉寺（同市南方）で修行中のインド僧ナガボディさん（ま）も作業に参加。祖国のために多くの日本人が力を貸してきているのを見て、目頭が熱くなった。フェルトペンを取り、物資を詰めた箱にハンディー語で書いた。

△この中には毛布が入っています。この中には日本人の心が入っています▽

全国から届いた毛布などの救援物資を段ボール箱に詰め込むAMDAのボランティアたち＝1月31日、岡山空港



根付いたボランティア